

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

ゆるしといやし

――マルコ伝第2章1～12節――

1964年5月3日

小池辰雄

屋根をはがし穴を開けて 超文化 体当たりの求め キリストそのものを求める 汝の罪赦されたり お前たちの罪を背負って 十字架の担い 霊子核 無条件の救 キリストの証人

【マルコ2:1～12】（私訳）

1 幾日かたつて、イエスはまたカペナウムに帰って来たが、彼が件の家^{くだん}に居ることが噂^{うわさ}されたので、² 群衆が集まって来て、戸口のあたりまで立錐の余地なきほどであった。そこで、彼は彼らに御言を語っていた。³ すると、人々が中風の者を四人の人に担^{かつ}がせて、イエスの御許に運んで来た。⁴ ところが、群衆のため彼をイエスの御許に連れて来れないので、彼らはイエスの居るあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の者が横たわっている担架を吊り下ろした。⁵ イエスは彼らの信仰を見て中風の者に言った、「子よ、お前の罪は赦^{ゆる}された」。⁶ ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、⁷ 「この人はなんであんなことを言うのか。べらぼうだ。誰が罪を赦せるか。神ひとりじゃないか」。⁸ イエスは、彼らが互いにそのように論じあっているのを直ちに彼の霊力で見抜いて、彼らに言った、「なんで、君たちはそのようなことを心の中で論議しているか。⁹ 中風の者に『お前の罪は赦された』と言うのと、『起きよ、担架をかついで歩け』と言うのと、どっちがやさしいか。¹⁰ だが、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを君たちに分かせてやるためだ」。そう言つて、イエスは中風の者に言った、¹¹ 「お前に言う、起きよ、お前の担架をかついで、お前の家に行け」。¹² すると、彼は起き上がり、直ちに担架をかついでみんなの前を出て行った。みんなは驚嘆して神を讃えて言った、「こんなことはかつて見たことがない」。

● 屋根をはがし穴を開けて

私は自分の訳を読みます。

1 幾日かたつて、イエスはまたカペナウムに帰って来たが、彼が件の家^{くだん}に居ることが噂^{うわさ}されたので、² 群衆が集まって来て、戸口のあたりまで立錐の



余地なきほどであった。そこで、彼は彼らに御言を語っていた。³すると、人々が中風の者を四人の人に担^{かつ}がせて、イエスの御許に運んで来た。⁴ところが、群衆のため彼をイエスの御許に連れて来れないので、彼らはイエスの居るあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の者が横たわっている担架を吊り下ろした。⁵イエスは彼らの信仰を見て中風の者に言った、「子よ、お前の罪は赦^{ゆる}された」。

相当の記事はマタイ伝9章1～8節、ルカ伝5章17～26節です。大体、マルコ伝とルカ伝が似ています。イエスは伝道の根拠地をカペナウムに置いておられた。カペナウムにまた帰って来られた。ただ「家にて」と書いてあるが、これは

「例の家にて、いつも泊まられるところの家にて」

という意であると思われます。それで、私は「件の家^{くだん}に」と、ちよつと付け加えたわけです。「件^{くだん}」という言葉は、若い方にはちよつとなじみがないかも知れませんが。

「普段、そういうようにしている」

というような気持の字がこの「件」という字です。

それが語り告げられたので、もうイエスの評判が非常にたつていますので、群衆が集まってきた、戸口の所まで立錐の余地がないほどであった。「立錐の余地」という言葉はもちろん日本語的表現ですが、「余地がないほどに」という言葉です。そこで、彼は彼らに御言を語った。「トン ロゴン」「御言」というのは、単数の定冠詞が付いた形になっています。「ロゴス」という言葉の四格ですが、これはただその一語を語ったのではなくて、これは「福音」「ユウアンゲリオン」という意味です。「言を語った」とは「福音を語った」という意味です。

「すると、人々が中風の者を四人の人に担がせた」

というのだから、だいぶ担架式なものです。塚本先生も「担架」と訳しておられる。四人の人が病人を乗せて担いで来たわけです。何歳の病人だか、どういう程度の中風だか分かりませんが、よほどひどかったと思います。

「ぜひとも治していただきたい」

という切なる願いをもつて来たわけです。ところが、群衆が押し合いへし合いしているものですから、一向近寄れない。仕方がないから、彼らはイエスの居るあたりの屋根を剥がした。向こうでは大体、周りは石で出来ていて、天上は漆喰^{しっくい}であるらしいので、その漆喰の所に――粘土の土です――穴を開けて、中風の者を横たわったまま吊り下ろした。そうすると、

⁵イエスは彼らの信仰を見て中風の者に言った、「子よ、お前の罪は赦^{ゆる}された」。

非常に劇的な場面です。ちよつとこれは常識をはずれている。いくら何でも、屋根をぶち開けて吊り下ろすなんていうのは余程のことです。大体、そのような事は抑えようとする。第一、そんなことはとても許さないでしょう。非常手段にうったえたわけです。イエスは、



「どうも、随分ひどいことをする」

なんてはおつしやらない。

「彼らの信仰を見て」

というわけです。

●超文化

聖書の信仰の現実というものは、そのような質のものです。恥も外聞も常識もない。超文化的である。ある意味においては、非文化と言ってもいいくらいです。いわゆる道徳の判断では、あるいは社会道徳というようなことでは、どうも受けとりにくいような現実がしばしばある。もちろん、今と時代が違いますから、そのようなことが或る意味においては出来たとも、相対的には言えるでしょう。けれども、どのように世の中が文化的になりまして、信仰というものの質が、文化によって水を割られるようなことであつてはダメなんです。

私は「宗教と文化」という題で東大の最終講義をいたしました。が、今度の『曠野の愛』（第37号）にそれを載せたわけです。この中でも私は申しているように、宗教と文化――私たちにおいては福音ですが――これは次元が違う。宗教の世界は根底の無の世界で、見えない。見えないが、一番深い現実である。宗教は根の世界であつて、幹と枝葉と花と果の文化の世界とは、その方向が反対で、性質が違う、次元が違うということをお話いたしました。福音の世界に対する我々の、一般のクリスチャンの自覚というものは、掴み方というのは、非常にまだ希薄です。

イエスがこの乱暴な行爲を見て、

「彼らの信仰を見て」

と言われた。信仰には、そのようなひたむきなところがなければダメなんです。その点では、私は大胆に反文化と言ってもいいと思う。しかしながら、この反文化なものが実は本当の意味において文化の花を咲かせる土台である。真理はそのような逆説の中に深い消息がある。私たちはその時に、この病人を担いでいたところの四人の人たちのような行動に果たして出られたらうかと、省みてみる。それだけの気合を持っているクリスチャンが君たちの中にあるかと、今私は問いたいくらいです。また、一般のキリスト教界でどうだろうか。とにかく、日蓮宗とか、創価学会とか、何々とか他にいろいろありますが。もちろん、彼らのいろいろなやり方について非難されるべきものがあるでしょうけれども、とにかく、ひたむきというものを持つていなかったら、そういった質においてキリスト教徒がそれに負けるようなことだったら、それはダメです。

問題は物質の世界ではない。魂の迫力の問題です。もちろん、福音の内容は極めて素晴らしいということは言うまでもないですが、極めて素晴らしい内容を持った福音をただ頭



や単なる感情的なもので捉えているくらいでは、福音そのものに対してクリスチャンは誠に申し訳ない始末である。

●体当たりのな求め

そのようなドラマチックな、屋根を突き破ってもなおキリストを求めるという、それがやはり突破です。

「求めよ、さらば与える」

という、その「求め」とは実にこのような、屋根を突き破るほどの体当たりのな求めです。

盲人が道端に坐っていた。イエスの行列がやって来た。イエスが来たということを聞いて、「メシヤ！」と言って叫んでやまない。みんなが

「そんなに叫ぶな」

と言うのに、いよいよ叫んでやまない。イエスが

「彼を呼べ」

と。イエスという人はどんな人であろうかと、今度は桑の樹きに上ったザアカイというのがいる。偉い人を迎えるのに、桑の樹の上から見下ろすなんていうことは失礼であると、常識的な道徳は思うかもしれない。けれども、そのザアカイはイエスを見たくてたまらなから、群衆を押し分けて、桑の樹に上って見る。イエスはそれを下から見上げて、

「私は今日、お前の所に行つて泊まるぞ」

と。こういう気合の世界です。

こないだの祈祷会で、私は詩篇第63篇を

「全存在をもつて魂も身体も汝を慕うと言って祈っている」

と言った。イエスという人自身が神に向かつて、そういった人であった。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いをつくし、力を尽くして汝の神を愛せよ」

というのは、何も形容詞を並べているのではない。畳みかけて、

「本当に全存在をもつて神の中に自分をぶち入れる。これが愛というものだ。体裁

ではないぞ。自分を投げ出すことが愛である。献げ尽くすことが愛である」

というのです。

この四人の担いでいる者また中風の人がどのような心境にあつたかは、ここに書いてない。でも、この四人の者は一心になつて、この中風の病人を執成している。この集会というものはそのような、一心になることが大事です。一つ心になつていなければ。今、たくさんの方々に集会をやっていますが、体裁の集会ではいくら何人いようがダメです。また、どんなに少なからうが、本当にそれが、四人が一つ心になつてキリストに向かつて行く。そして、常識を乗り越えて、屋根を剥がして穴を開けていく。なにも、奇行をせよということではない。常識をいつも踏み破るようなことをせよ、と言うのではない。けれども、信



仰の性格の態勢というものは、我々の地上の相対的現実を常に突き破っているような態勢でなければ、この相対的現実を本当の現実^にに直すということが、勝つということができない。この現実^にに妥協しているようなことであつたら、これは信仰の世界ではない。神の国の世界ではない。どんなに静かでありまして、その人の魂と全存在の態勢というものは、このような決河の態勢を持つていなければダメです。また、その時に必ずこの相対的現実を担うということが本当にできる。この突破のできる人でなければ担えない。「担う」なんていう言葉が体裁になつたらダメです。

そういう意味において、私たちはこの4節を読んで、本当にそうだと思う。それでこそ、またそうでなければ、力も来ないし、生命も来ないです、正直。魂の世界というのは誤魔化しがきかないですからね。体裁でなんか、力が来るものではない。

だから、イエスはそういう態勢の方であるから、そういう態勢の魂を見ればもう――福音書を読んでごらんさい――キリストの喜ぶのはみんなそれですから。放蕩息子がすつからかんになつて、

「どうも悪かった」

と言つて、ボロを着てはだしになつて帰つてくれば、父は窓からこれを遠くから見、はたと走つて行つて息子を抱くという。それが本当にキリストの愛、神の愛だという。あるがままの己を体裁なく投げ出すところに、誠があり、砕けがある。これが本当の

「求めよ」

なんです。

「叩け」

とはこのことです。手でノックするのではない。

「全身をもつてドアにぶつかれ。お前は倒れるよ。そうしたら、ドアが開くぞ」

というような世界です。

●キリストそのものを求める

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば、見いださん」

という。どこまでも尋ねぬく。どこまでも叩きぬく。どこまでも求めぬく。そういう魂を神さまは、キリストは絶対に捨てたまわない。必ず見いだす。必ず与えられる。

それは、究極において何を求めているか。神そのものを、キリストそのものを求める。しかし、私たちが「神を求める」と言つても、それは茫漠^{ぼうぼく}として觀念になつてしまふ。神を求めんとする人は先ずキリストを求めなくてはダメです。「神」というけれども、キリストです。

聖書がたとえ何百巻の仏典みたいな書であつても、もし福音書がなかったならば聖書にならない。福音書というものは何と言つても、この聖書66巻の始めであり終りである。な



んとならば、キリストが最も直々にそこに現象している世界です。神を現象しているところのイエスというひと。あなた方が、

「あなたの最大の愛読書は何ですか」

と聞かれたときに、直ちに

「福音書です」

と答えられなかったらうそだ。本当の信仰に来てない。福音書が本当に何ものよりも親しくなつて、これを読み破るように、この福音書に親しみ、このキリストに親しまなくては。福音書は、あまりにもみんなに知られているような顔しているけれども、ちつとも知られていやしない。福音書を本当に知るとなつたら、これは一生かかっても、知りつくせるものではない。「知る」というのは、頭で知るのはない。全存在をもつてこれを知る。これをつかむということです。

どうか、皆さん、私たちがこの集会をやっているのは、歴史的な意味があることをしっかりと自覚していただきたい。皆さん一人ひとりが伝道者であることを自覚していただきたい。いずこの環境におきましても、この生活をとおして、もつと伝道的な意欲が盛んにならないければダメです。人に何と思われても、神さまに喜ばれることをして行っていたきたい。そして、

「汝らはわが名のために全ての人に憎まれる」

と、キリストは言っている。イエスという人は激しい人です。非常に柔和な方であると同時に非常に激しい方です。福音というものは、非常に穏やかな柔和なものを持っていると共に、もの凄い火よりも烈しいものを持っている。あなた方は、本当にこの自覚を持って進んでいたかなくては、神さまに申し訳ない始末です。

こないだの祈禱会をいたしましたが、まだまだと私は思っている。とにかく、いろいろな事情もあるでしょうが、キリストが言っている通り、神の国に招かれた時に

「こうである。ああである」

と言って、いろいろ申し訳けや申し開きを言っているうちはダメです、それを乗り越えなくては。

●汝の罪赦されたり

中風の者を担架に乗せたまま、屋根を突き破つて吊り下ろすような態勢の信仰である。

「イエスは彼らの信仰を見て」

という。「察して」ではない。「信仰を見て」という。霊で信仰を見ている。キリストは現象の奥の世界を見ておられる。その対象そのものにおいて、キリストは心身一体の事態を見ておられた。心身一如の世界を見ておられた。

そして、中風の者に言った、「子よ、お前の罪は赦ゆるされた」



感動する世界です。何ということでしょうね。「子よ、お前の罪は赦された」と。私は今の口語訳は嫌いなんだよ。キリストの気合がかかってこない。

どんな罪を犯したのか知らない。とにかく、それは「諸々の罪」という複数で書いてある。

「お前のいろいろな罪は赦された」

と。「癒^{いや}された」とは言わない。

「お前は中風で困っているが、みんなが非常に熱心だから、それではひとつ祈って

癒してやろう」

なんて、そんな暢^{のんき}気なものではない。

「汝の罪、赦されたり」

と。何という本当の権威の人かと思う。神の子です。「罪が赦された」というのは非常な言葉である。

7 「この人はなんであんなことを言うのか。べらぼうだ。

「べらぼうだ」というのは、「ブラスフェーメイ」というギリシャ語で、ちよつと日本語の発音が似ているから、「べらぼう」という訳に私はした。そんなべらぼうな訳をするかというが、仕方がない。「冒瀆」という字です。冒瀆的なことを、「そんなべらぼうなことを」と。これは私は靈感で訳した。

べらぼうだ。誰が罪を赦せるか。神ひとりじゃないか。」

これが彼らの言葉の調子です。

「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」

と、これが口語訳です。

「誰が罪を赦せるか。神ひとりじゃないか」

と。会話の言葉というものは、論理的に出てこない。むしろ、波状的な畳みかけで出てくる。我々は対話している時にもそうですよ。主語が後に来たりね。むしろ、そのまま訳したほうが、ギリシャ語の調子が出てくる。

「神おひとりのほかに……」

という訳を塚本先生はしてらっしゃいますけれども、先生の言葉は少し品がよすぎる。「誰が罪を許せるか。神ひとりじゃないか」といったような調子だと私は思う。

「キリストは冒瀆なやつだ」

というわけで、怒ってしまっているんですよ。

「神さまの他に誰が許せるか」

というようなわけで、批判してぶつぶつ言っているわけです。



●お前たちの罪を背負って

ところが、

8 イエスは、彼らが互いにそのように論じあっているのを直ちに彼の霊力で見抜いて、彼らに言った、「なんで、君たちはそのようなことを心の中で論議しているか。9 中風の者に『お前の罪は赦された』と言うのと、『起きよ、担架をかついで歩け』と言うのと、どっちがやさしいか。10 だが、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを君たちに分かせてやるためだ。そう言つて、イエスは中風の者に言つた、11「お前に言う、起きよ、お前の担架をかついで、お前の家に行け」。12すると、彼は起き上がり、直ちに担架をかついでみんなの前を出て行つた。みんなは驚嘆して神を讃えて言つた、「こんなことはかつて見たことがない」。

ユダヤ教においてはもちろん、神の他に罪を赦せるということとは考えられなかったから、こういうことを言われたのは冒瀆である。キリストは、そのようにしてみんなに悪口を言われることはもう覚悟のうえです。罪のゆるしができるのは、神のほかにはひとりもない。その通りです。もし、イエスが神の子でなかったならば、その言葉は全く冒瀆でしょう。けれども、イエスが神の子であり、実に彼自身が――別な言葉で言つて――神でありたもう。そういうようなわけですので、事実を証明したんです。それは旧約に言われているところの「メシヤ」です。こういう言葉が、彼がメシヤであることを自ら自証していらつしやるところの事態です。

詩篇103篇に、

「全ての不義を赦し、全ての病を癒す」

という言葉がある。

「3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし 汝のすべての疾をいやす」(詩篇

103・3)

と。また、イザヤによつて預言されているところの事態が――一番、旧約で深くて高い預言書はイザヤ書ですが――そのイザヤ書に預言されていることが全部、キリストにおいて成就しているわけです。その意味において、時々、イザヤ書が引用されます。

イエスが最初に伝道された時に――ルカ伝の始めの方に書いてありますが――イザヤ書が読まれたわけです。イザヤ書53章に、

「4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、

私が「碎け」と言つたのは、この言葉による。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれ



らは癒されたり。⁶われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまへり。」（イザヤ53・4～6）

そのように苦しめられたけれども、彼は口を開かず、弁明をしない。みんな私たちの間違いを、一切これを担っている。担いの態勢です。担う人が最大の勝利者です。敵を倒す人ではない。最大の勝利者は、相手を担って、そのマイナスを全部、自分が背負ってしまう。「負う」という字は「マイナスとなる」「負」という字です。そして、自分のプラスを与える。プラスとマイナスの交換をする。それが「贖い」ということです。キリストの赦しは、

「私は義人だから、お前たちを赦す資格がある」
と言うような、威張っている赦しではない。

「お前たちの罪をみんな背負って、自分が十字架に架かる」
と。これが

「汝の罪、ゆるされたり」

ということ。キリストは、その「罪ゆるされたり」という権威は、深い愛をもって背負っているのです。そのことをやがて、十字架をもつて彼は実証してしまう。空言でない。キリストの約束はみな成就されていく。

●十字架の担い

人生は、いろいろな事が起きます。人間の間というものはダメなものです。けれども、この十字架の担いを主と共にする人は、もはや本当の行き詰まりを知らない人になる。^{しやく}癩にさわることも、どんなこともみんな担ってしまうから。どんなに人に誤解され、またどんなに人に誤られ中傷されようが、

「ああ結構でございます」

と。昔の日本の偉大な坊さんにはそういう角度の魂のひとが幾人もいます。にこにこしてみんなそれを自分で背負ってしまう。仏さんの世界でも、そういう坊さんがいた。昔の高僧の伝記を読む方がはるかに、聖書を読むのに良き註解となる。

そういう担いは、担いの力は、救いの事実による。

「汝の罪はゆるされたり」

と。私たちは、「罪ゆるされたり」と人には言えないけれども、人の罪を本当にキリストの十字架によって赦すことができる。

「私たちのゆるすが如く、私たちの罪もゆるしてください」

と、「主の祈り」にあるでしょ。赦しは、私たちは手放しではゆるせない。感情的にはある程度ゆるしますよ。しかし、それは本当の赦しではない。

「我々のゆるすが如く」



というのは、十字架にあつて本当に人を赦すことができる。キリストの十字架にあつてこそ、赦すことができる。キリストと共に十字架されてこそ、赦すことができる。その人の祈りは、その立場に立った祈りは、必ずきかれる。

その担いは、どうして可能であるか。それはキリストの、聖霊の力、生命、愛がくるから、十字架が負えるのであつて、御霊が来なかったら、いくら「十字架」と言つても、十字架は観念である。本当に十字架されれば、必ず御霊が来る。

そういう担いの態勢です。まだ、地上の相対的な「どうだ、こうだ」を勘定しているうちはダメです、そいつが突き抜けない限りは。私たちは、普段の現実というのは、いろいろなことをやっていい。けれども、魂の奥底がいつもこの奥の世界で、完全にそれを突破しているところの事態を、現実を持つていなければならダメです。

私なんてやつは、皆さんが見ると、デタラメな男のように見えるかもしれない。けれども、私の中の一番本当のところは無なんです。それは御霊が来ているから。キリストのこの恩寵の中にいるから、私は自分自身がどんなに自分で自分に愛想をつかしても、決して絶望しない。なんとなれば、キリストが私のうちに、十字架をもつて切り開き、御霊をもつて担うところの力を与えてくださっているから。我々クリスチャンが、みな同質的にこのところに来なかったなら、「信仰、信仰」なんて言つたつて、それはつまらんです。

我々は、この四人の担架を担いでいた人たちと同じく圧倒されると共に、今度は、キリストの

「汝の罪ゆるされたり」

というように、この赦しをこの十字架によつて本当に展開して持つような、魂の事態にまで入っていく。それは神の子だから、そうです。しかし、私たちは、神の子のその現実の中に入つて、本当に人のために人をゆるし、人を執成すことができる。手放しではない。手放しで人なんか赦したら、それは冒瀆です。それはどこまでもキリストに在つての話、御霊に在つての話です。

●霊子核

そして、魂のゆるしが即ち、魂のいやしですから。魂が本当に癒される。人間の存在の中心は、何と言つても、この魂ですから。

「健全なる魂は健全なる肉体に宿る」

ではない。健全なる魂が、健全なる肉体を展開していく。地上ではどの肉体も決して健全ではありません。みんな私たちはそれぞれ、ある程度の欠陥を持っている。本当に欠陥がなければ、いつまでも生きていますよ。我々は、いつかは地上をさよならしなければならぬのは、とにかく欠陥を持つている。それは私たちの魂それ自身が罪を負つた魂だから。けれども、にもかかわらず、死んでも死なないものが来ている。御霊が来ている。



霊子核、霊子というものが来ている。人間の存在の中には、たとえ構造として究極が原子でありましても、なお原子では説明がつかない世界がある。それは霊子の世界である。日本人はもともと魂の民です。大和魂やまとと言いますが、大和魂というのがキリストの霊子を、御霊を受けとらなくてはダメです。御霊という霊子核です。霊子核を受けとれば、そこにもの凄いエネルギーがある。本当のエネルギーはこの霊子核、霊、キリストの御霊です。この御霊が臨んできたなら、ペンテコステとなった。キリスト教会の歴史はそこから始まっている。

私たちは、どんなにお互いさまにダメでありましても、決してダメでないんです。それで担っていくことができる。生まれつきの才能とか、性質ではない。

「新たに造られたり」

とキリストが言われたのはそのことです。新創造です。

「本当の文化の創造のために我々は福音を語る」

と、今度の講演会のビラに書いてある。できるだけ、あなた方は人を集めてください。私は本当に生命賭けで語るから。いい加減な気持ではダメですよ。

●「はいっ」と言う世界

そういうわけで、キリストの担いです。

「起きよ。床を、担架をかついで歩け」

と。何で、そのようなことを言っているか。キリストはこの病人に、

「汝の罪、ゆるされたり」

と、まず先に言った。罪の赦しを先ず言って、それから、

「立て、起きよ」

と言った。キリストが「起きよ」と言うときには、その人の魂の一番深いところに向かって、呼びかけているんです。これに、

「はいっ！」

と答える人は起きられる。「でも」と言って、逆らう人や疑う人は起きられない。福音の世界は簡単なんです。

「福音の世界は、『はいっ』と言う世界だ」

と、私は言ってもいいと思う。一言、「はいっ」と言ってはつきり答えることが、何とこの頃の若い人には少なくなっただろうと、私は思う。ただ昔を良いと言うわけではないけれども。すぐ頭で理屈を考える。それが文化病というやつです。だんだん、人間はダメになっっていく。

神の言葉、神の行為が現象してやまないとこのころの、この聖書というのは教えではない。「キリスト教」なんて言うからいかん。これが私たちに、「はいっ」と答えさせるか、「否いな」と言っ



て、あるいは疑って逃げて行くかの、どっちかなんだ。

「あなたの言うことが分かりました」

なんて、「分かりました」なんて、そんな世界ではない。降参して、「はいっ」と言う人がこの文字の奥の世界に入れる。何か分からないが、「はいっ」と言う人があとから分かってくる、もし分かるというなら。

「分かってから、入ろう」

なんていうのでは入れない。

「ただ為すことあるのみ」

という。これはテニソンの言葉です。心の中で「はいっ」と言っつて、アブラハムもまたイサクを献げた。何だか分からない。神さまが、

「ホレブの山に向かつて、お前はイサクを連れて行け。薪を背負わせて行け。

これを献^{ささ}げろ」

と言う。なぜなの分からない。あまりにひどい命令だから。だけど、アブラハムは「はいっ」とも言わず、黙って従った。「黙って従った」という行為が即ち「はいっ」である。だから、ヤコブが、

「アブラハムはその行為によって義とされた」

と言った。また、

「アブラハムはその信仰によって義とされた」

と、パウロは言った。同じことです。信仰も行為もピタリ一つです。

そういうように、キリストに「はいっ」と言っつて、言下に立ち上がったら、立てたんです。まあ、私みたいな者を通して、そういう経験があります。びっこをひいて来た人が立ってしまふ。私ではない。キリストが為したものであつて、私はただ平伏すばかりです。どうか、皆さん一人ひとりが本当にもう――資格も何もありません――単純率直に「はいっ」と言うだけです。

今、熱を病んでいる友人がある。その人が本当にこここのところを同じく読んで、このイエスの御言に自分をとつぷり漬けて、

「起きよー!」

「はいっ!」

と言っつて、起きられる。キリストを本当に魂が白熱をもつて受けとつたならば、病の熱なんかには勝つてしまふ。私は乱暴なことを言うけれどもね。たとえ病がその時に癒えなかつても、その魂の気合が大事です。もし癒えなければ、神さまに何かの理由がありでしょう。しかし、そのような態勢で立ち向かうことが極めて大事なことです。結果の問題ではない。何回それが聞かれなかつても、神さまを受けとるところの角度の祈りというもの、決して水を割つてはいかん。



「これで私はもう大体、望みはやめた」
と。それはダメですよ。

「望むべきにあらぬときに、なお望みたり」

とパウロは言った。神さまの世界は無限定の世界であり、表現を知らざるところの世界です。神さまの生命というものは無限定の世界で、神の創造の力というものは無限の世界です。だから、私は無即無限と言う。こちらが無となれば、無限です。

●無条件の救

こういうところを読んでですよ、ただ病の癒しのことを言っているのではない。イエス・キリストの現実というものが、私たちの欠陥にも、罪にもかかわらず、既に赦されてある現実であり、既に癒されてある現実を根底においていただいて、それであるからいよいよ赦されていくぞということなんです。根底には赦しというのは完全に来ていいます。

「まだ、私は赦されていません」

とか、

「まだ、私は癒されていません」

なんて、なぜ言うか。神さまの現実、赦しというのが根底的にイエス・キリストをもつて来ているんだ。これがメシヤ、救いということ。救いは限定的な救いではない。無条件の救いです。無条件の救いが、無条件に受ける人には来ているんです。そういう根底だから、進んで行ける。

道徳の世界は、

「こうせよ、ああせよ」

と言って、段々善くなろうとする。決してそれは本当の世界には行かない。また、お医者さんはいろんな薬や、医学、医術でもって治す。悪くはない。けれども、それもやはり、いくらやつても、あるところまでしか行かない。生命そのものは絶対に神さまのものです。だから、生命そのものを、義そのものを全的に奥の世界に――生命の、医術の奥の世界をまずキリストは与えてくださる――受けなさいと言う。相対的にいろいろ薬を塗ったりしていい。キリストだって、^{たとえ}譬話の中で油を塗らせている譬話もありますよ、油なんか要らないキリストですけれども。

問題はいつも、その根底のものを、一番根源のものを受けとることだけです。それを忘れて、他のことをやっているからいかん。解決済みなんです。現象がどんなに複雑怪奇であろうと、どんなに悩み多き涙の谷であろうと解決済みなんです、キリストに在るものは。

「天国わがうちに在り」

というわけです。これが即ち、「赦されたり」であり、「癒されたり」である。

「起きよ、担架をとりて家に帰れ」



たとえば、今度は逆に一人で担架を担いで家に帰って行く。四人の人の助けはいらない。

「お前は起きて、担架をかついで帰れ」

と。まあ、驚いた話です。非常にドラマチックな一場面である。

ルカ伝の方には、

「なぜ、お前たちはそういう悪いことを考えるか」

なんてことが書いてあるくらいです。

「人の子が罪を赦す権威があることを汝らに知らせんがために」

と。常に私たちと同じ姿に立っているイエスが、罪を赦す権威を持っている。そしてまた、それはもちろん、天界に行かれたイエス・キリストが、その聖霊を通して私たちに十字架と聖霊を通して、赦しと本当の生命の賦与と、また義の賦与とをなしたもう。

「その魅りは我らの義のためである。その十字架は我らの罪のためである」

とパウロが言いました。

●キリストの証人

私が無教会にいた頃には、全然そういった現象的なことが起きない。「無教会信仰」なんて言ってやっているけれどもね。けれども或る時から、聖霊のバプテスマというものを本当に受けてから、不思議なことが起きている。あなた方が、例えば絵に携わっている人が、絵に行き詰まってしまったのが、絵が展開し始めていく。何であろうと、学問であろうと、何をしようと、編み物をしようと、みなそれぞれ展開を始める。それは神の栄光の現れである。御利益でも何でもない。いわゆる宗教と現象的に似たものがありましても、質が違うんです。神の栄光ということ、キリストの栄光ということをぬきにして、ただ現象を追っていたら、それは宗教にはなるかも知れないけれども、福音ではない。

福音の世界はどこまでも、キリストを証する世界である。私たちが何かをすることではない。何かを私を通してキリストが為したもので、それは証人となることです。ノーベル賞をとるような素晴らしい発明発見をやってくださいよ。みなこれはキリストの証人としてだ。イエスの御霊のエネルギーはその人を通してそれぞれの才能において限りなく展開せしめたもう。何と素晴らしいことであろうか。春のいろんな万物がふつふつと芽を出し緑していくように、またいろんな花が百花繚乱と咲くように、キリストの陽光を、栄光を浴びているものが、みなそのようになっていく。どうか、白熱の祈りをもって――魂の中にです、魂の中で本当に白熱の迫りをもつて――何をもぶちまけるような求めをもつて、進んでください。必ず行くから。まだまだ気合がかかってない。気合と言ったらおかしいかも知れないけれども。

私たちにはそういう使命がある。あなた方一人ひとり、そのような意味における伝道者です。



「二人で信仰してお終い」

なんて、そんなものじゃないですよ。展開また展開、あなた方自身が核分裂をどしどし起こすような事態になっていただきたい。

「何かしらんが、あいつは生命力に満ちているな」

と不思議がるような、そういう不思議な存在にいいよなっていたきたい。キリストがそこに来ているれば、それは本当です。そうでないものは観念主義です。

¹²そして、彼は起き上がり、直ちに担架を担いでみんなの前へ出ていった。

みんなは驚いてしまつて神を讃^{たた}えて言った、

「みんな」というのは、他のそこに集まつた群衆です。片一方のぶつぶつ言っていたやつは、とにかく驚いてしまつて、そしてまた妬^{ねた}んだに相違ない。

「こんなことはかつて見たことがない」。

「日の下に新しきことなし」

という。けれども、ここに、日の下に新しきことが起きた。罪のゆるしと私たちの病のいやし。全存在の根底的な改造、新創造が始まる。福音を受けて、この新創造が自分のうちに根底的に起きてこなかったら、それは信仰だなんて言つたつて、体裁^{ていさい}信仰だ。なるほど、屋根をぶち破るほどの求めがなければ、かなわないところの事態である。寝ていたつていいですよ、友も捕まらなくても。それでも、魂が屋根をぶち破るようなものを持たなくては。何も乱暴せよと、そんなことを言っているのではない。どうか、そういうわけで、いよいよ前進また前進しつつ、倒れても躓^{つまず}いても転^{ころ}んでも、ただ前進あるのみです。おしまい。

